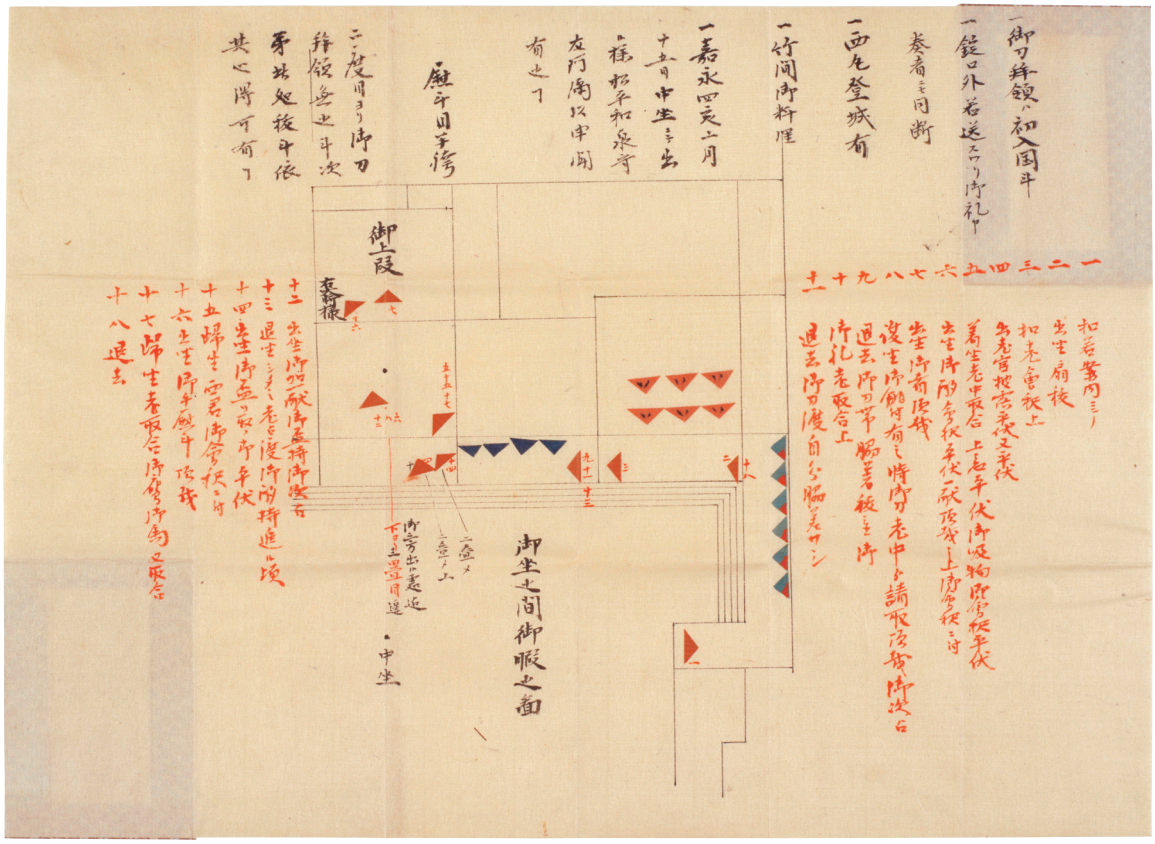
NO.86

蓬左

HÔSA



宗廟朝庭之礼
「御座之間御暇之図」

名古屋市蓬左文庫
HÔSA LIBRARY CITY OF NAGOYA

展示室1・2

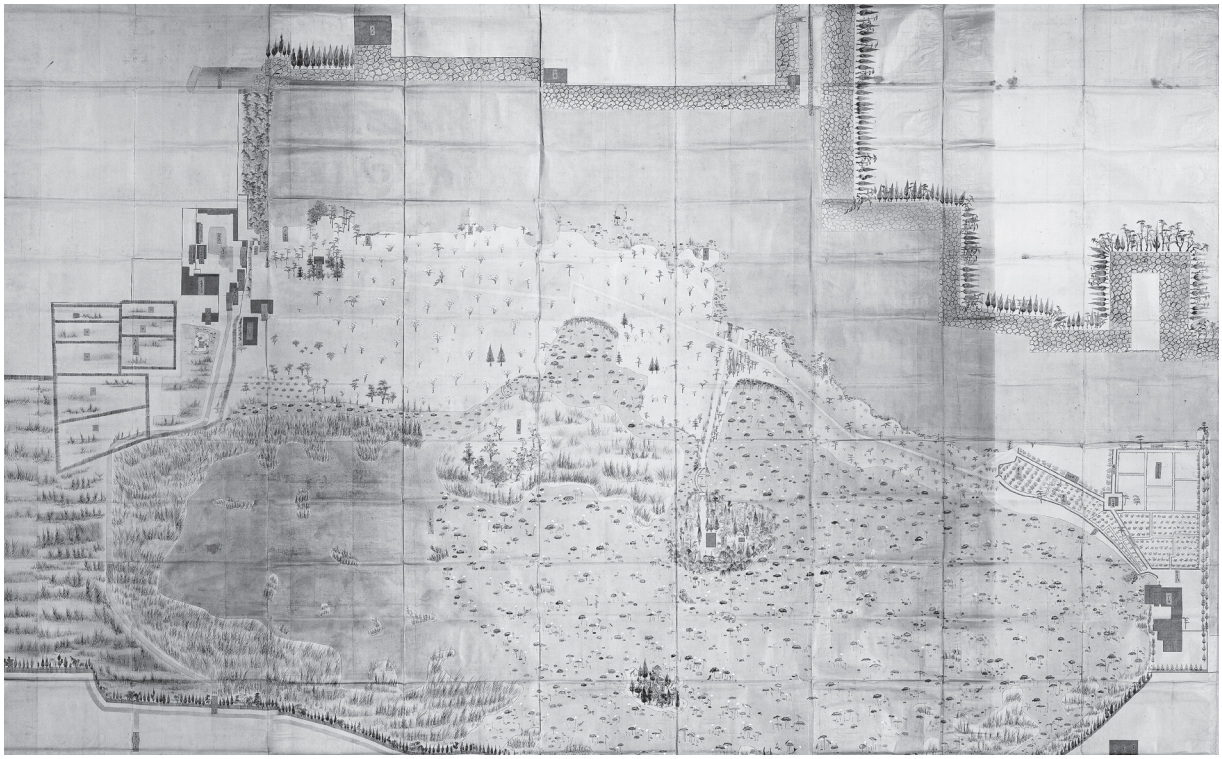
名古屋城・下御深井御庭
―殿さまの秘園―

名古屋城は徳川家康が計画創建し、尾張徳川家の居城として金の鯱を天守閣にいただいた名城でした。戦災で焼失するまでは、城郭建築・御殿建築の最高峰でした。名古屋城の北に広がった下御深井御庭は、落城時の秘密の脱出口であり、藩主独占の領域で、知られることのない空間でした。江戸時代後期になると、園芸・陶芸・茶の湯など私的な大名庭園として整備されました。この展覧会では、初めて「秘密の園」を紹介します。

御深井焼
三島写俵型茶碗　銘万石（まんごく）
江戸時代　19世紀
徳川美術館蔵

下御深井御庭には、瀬戸の陶工が江戸時代初期から召し出され、茶道具を焼くための御庭焼が開かれた。一時中断した時期があるものの十代藩主斉朝以後、茶室や庭園整備も進み、伝来の名物茶器を写して「深井製」窯印を捺した御深井焼が焼成された。

「弁財天」
（「下御深井惣絵図」部分）



下御深井惣絵図（したおふけそうえず）　江戸時代　17－18世紀　徳川美術館蔵

初公開。縦5m、横8m50cmの巨大な御庭の絵図、尾張徳川家伝来の古絵図中、最大である。展示会場の制約から少し折りたたんで公開の予定。御蓮池に咲き誇るハスの花や樹木などが美しい彩色で絵画的に描かれている。池の中央小島には、弁財天を祀る建物や鳥居も描かれている。

展示室1・2　徳川美術館

歿後一三〇年記念　夏季特別展

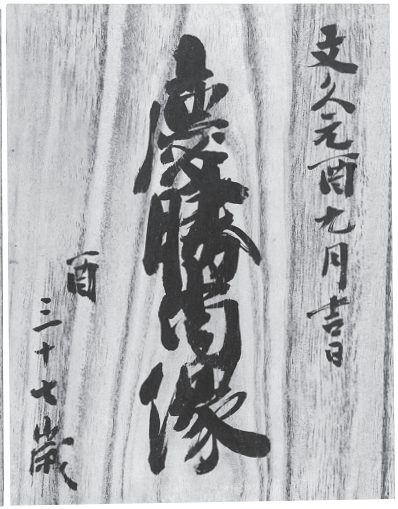
徳川慶勝
―知られざる写真家大名の生涯―

徳川慶勝（一八二四～八三）は、幕末・維新の混乱期に尾張徳川家の舵取りを担った事実上最後の殿様です。慶勝は、尾張徳川家の分家・高須松平家に生まれ、徳川将軍家からの養子当主が四代続いた尾張徳川家にとっては待望の分家出身者として十四代当主に迎えられました。将軍継嗣問題や開港問題にも深く関与して、安政の大獄で失脚したものの、井伊直弼暗殺後に復権し、政局を左右する重要な場面で指導力を発揮しました。

慶勝は、書画・博物学・文芸などにも造詣が深く、特に西洋から渡来した写真術を独自に研究して、数多くの貴重な写真を遺しました。この中にはこれまで紹介されたことのない江戸（東京）・名古屋などの風景写真も数多く含まれています。今年は慶勝の歿後一三〇年にあたり、政治家であると同時に、文化人としても多彩な才能を発揮した慶勝の素顔と業績を紹介します。

月に葡萄図　徳川家慶（いえよし）筆
松平義恕（徳川慶勝）拝領
江戸時代　19世紀　徳川美術館蔵

江戸城吹上御庭で行われた天保15年（1844）の武芸上覧の際、臨席した慶勝が十二代将軍家慶より拝領した家慶自筆の作品。慶勝は、当時まだ高須松平家の部屋住であった。



徳川慶勝肖像写真
文久元年（1861）　徳川林政史研究所蔵

写真技術の研究に取り組んだ慶勝が、初めて撮影に成功した自身の肖像写真。箱書には「三十七歳」とあるが慶勝38歳時の肖像である。

遠望鏡（天体望遠鏡）　徳川慶勝所用
イギリス製　19世紀　徳川美術館蔵

慶勝が尾張徳川家の家督を相続した嘉永2年（1849）に、相続祝いとして福岡黒田家より贈られたイギリス・ギルバート社製の天体望遠鏡。

展示室1

尾張名古屋の絵師たち

―高雅・清を中心に―

「尾張名古屋は城でもつ」と謳（うた）われた城下町・名古屋。江戸時代、東海随一の都市として発展し、そのにぎわいは名古屋を活動拠点とした絵師たちによって描き出されてきました。

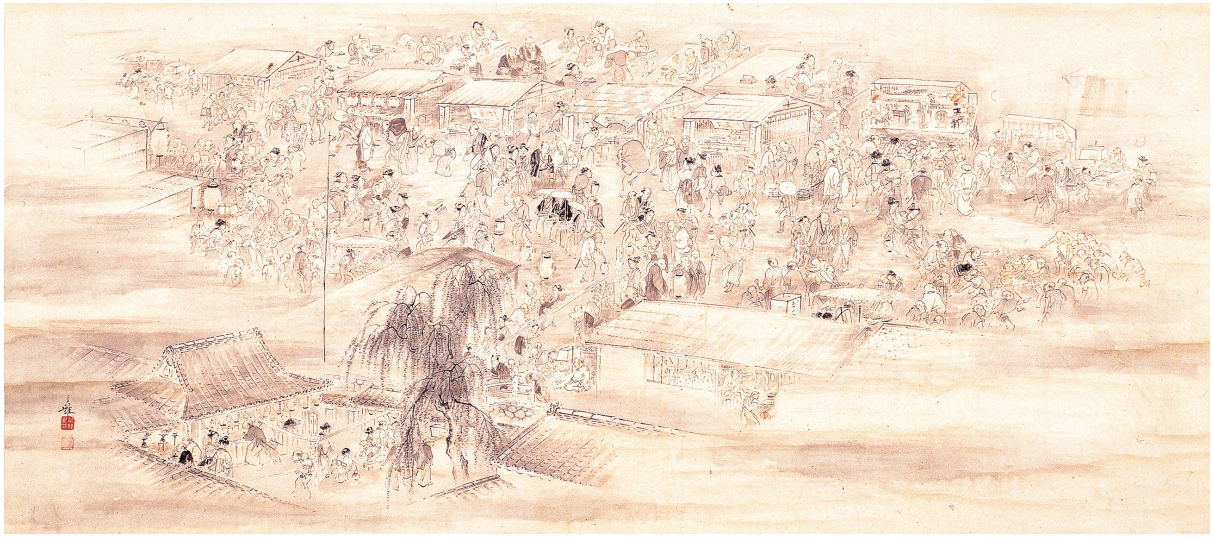
尾張のにぎわいを描いた絵師の代表格が、やまと絵系絵師の森高雅（もりたかまさ）（一七九一～一八六四）と渡辺清（きよし）（一七七八～一八六一）です。高雅は、名古屋の繁栄を象徴する「名古屋東照宮祭礼」を尾張徳川家十代斉朝の命を受けて描いたほか、「尾張名所図屏風」（後期展示）や伊藤圭介をはじめ名古屋で活躍した人々の肖像画などを残しました。復古大和絵派の絵師・清は、典雅な故事人物図を展開する一方で、茶道松尾流の五代不俊斎の肖像画なども手がけ、名古屋の絵師たる矜持を示しました。

本展では、尾張名古屋を拠点に活躍した絵師に焦点をあて、彼らが描き出した尾張名古屋の活況を今に紹介します。また、名古屋東照宮祭礼図としては現存最古の描写内容を誇る新発見の「名古屋東照宮祭礼図屏風」（前期展示）を特別公開します。

展示室2

尾張のまつり

名古屋城下最大のまつりであった家康を祀る東照宮の祭礼や、津島を中心に尾張各地で行われる天王祭など、江戸時代の尾張のまつりを紹介します。



柳薬師夜開帳図　森高雅筆　江戸時代　19世紀　徳川美術館蔵

今はなき柳薬師の御開帳のにぎわいを描く。柳薬師は名古屋城下のメインストリート・広小路にあり、江戸時代は夜の開帳で人々の信仰を集めた。夕闇に浮かぶ往来の賑わいが巧みにあらわされている。

「長者町　道成寺」（「名古屋東照宮祭礼図屏風」部分）

名古屋東照宮祭礼図屏風　六曲一双のうち左隻　江戸時代　17世紀　個人蔵　（展示期間6月1日～6月23日）

名古屋東照宮祭礼の行列を描く新発見・現存最古の屏風。下段の山車が七間町（しちけんちょう）・本町・桑名町・長者町・上畠町の5基しかなく、長者町の山車が享保17年（1732）に替わった二福神でなく道成寺の作り物であることから、17世紀後半の景観をしめす。

三つの正保尾張国絵図

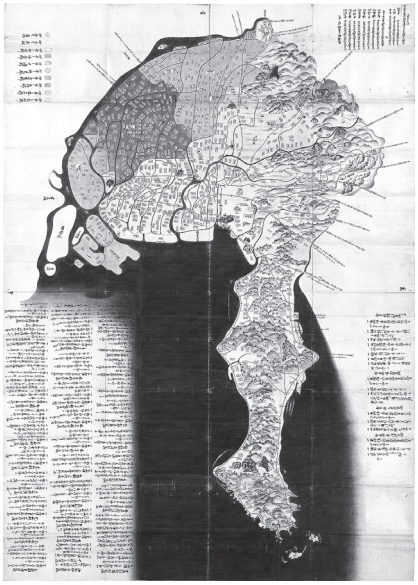
正保元年（一六四四）、江戸幕府は全国の大名・代官に国絵図の作成・献上を命令しました。全国を対象にした国絵図作成はこれが最初です。当時、将軍は三代家光で、幕府の威信が頂点を迎えていた時期です。各大名は国絵図を献上すると、領内のことがすべて幕府に知られてしまいます。国絵図と同時に、城と城下町を描いた城絵図の作成・献上も命じられました。城絵図には堀の幅や深さ、石垣の長さや高さなど、最高軍事機密というべき情報も記入しなければなりませんでした。

さて、この国絵図は幕府撰正保国絵図ともよばれていますが、献上された原本は数年後、明暦の大火ですべて焼失しました。ただし、絵図を作成した各大名家（絵図元といいます）には下図・控図・写図などが残っていることがあり、献上図のようすがある程度わかることがあります。尾張国図の絵図元は尾張藩で、尾張徳川家伝来の美術品を所蔵している徳川美術館は、正保尾張国図らしき図を三枚所蔵しています（写真下）。一枚は、成瀬家・竹腰家の鷹場が色分けされている図（「正保図」とする）です。次の一枚は、知多半島の東と西に三十五か所の古城跡の記述がある図（「古城図」とする）です。最後の一枚は、成瀬・竹腰・志水・横井・生駒・間宮の各家の鷹場が色分けされている図（「鷹場図」とする）です。以上三枚は正保図といえるのか、そうだとすれば尾張図作成・献上のどの段階に位置付けられるか、いまだ検討されていません。ここで検討のための材料を提供しようと思います。

まず「正保図」ですが、前述のとおり成瀬家・竹腰家という両家年寄（御付家老）の鷹場が色分けされています。ほかに白い二重線が名古屋の回りを囲んでいますが、これは「鷹場図」では銀線で描かれ、「御秘蔵之御鷹場」とあるので、藩主の鷹場を示していることになります。「正保図」は山林や主要な寺社、海岸など絵画としても非常に丁寧に描かれていますが、鷹場の絵図として必要だったのでしょうか。

左ページの拡大図をご覧ください。現在名古屋市中村区・中川区付近で、上下（南北）に流れているのは庄内川、川の東側が愛知郡、西側が海東郡です。水色が塗られたCとFの範囲は、AとDの「竹腰山城守鷹場」という記述により、竹腰家の鷹場であることがわかります。また鷹場ではないBは薄いピンクに塗られ愛知郡であることを、Eはオレンジで海東郡であることを表しています。ところがAの地色はピンク、Dはオレンジで、それぞれその場所の郡の色になっています。これらのことから、この図はBとEの郡の色を全体に塗ってからA・Dの文字を書き、文字の回りを四角形に空けてC・Fの鷹場の色を塗ったと考えられます。つまりこの図は当初郡ごとに色分けされた図として完成しており、後日鷹場の情報を加えた、いわば再利用図と考

鷹場図

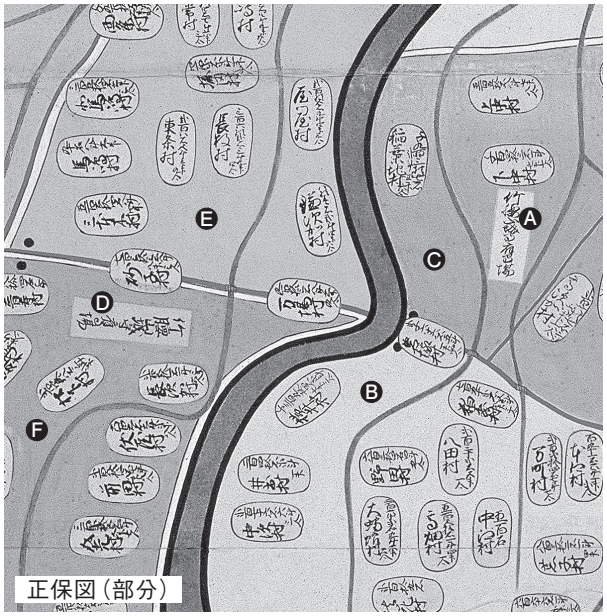


古城図

正保図

えられます。元図に鷹場の情報を加えたという点では「鷹場図」も同じです。「古城図」は愛知郡・春日井郡の東部に「○○御林」と書かれた丸形や四角形の金箔が貼られていますが、これも後日の作業と考えられます（古城のリストは保留にします）。結局この三図から鷹場・御林・古城の情報を省くと、三図ともほぼ同一で、これが正保国絵図の下図・控図ではないかと考えられます。正保国絵図については幕府の統一した仕様があり、この三図がどの程度仕様を守っているか、次に検討します。

まず一番重要な縮尺ですが、幕府の仕様では六寸一里です。三図の一里塚と一里塚の間の長さを測ると、だいたい十八cmで幕府の仕様を守っています。ところが、幕府の仕様では隣国（尾張図では伊勢・美濃・三河）の地色をそれぞれ別の色で塗り分ける必要があります。ところが三図ともこの隣国色分が施されていません。さらに街道が国境を越える箇所には、国境から隣国の一番近い村までの距離を記さなければなりませんが、三図ではたとえば「名古屋城下壱里山より内津道濃州山境迄五里弐拾八丁拾間」などと、城下から国境までの距離が記されています。



正保図（部分）

ほかにも三図は多くの点で幕府の仕様と異なっていますが、一番の違いは郡分けの方法です。図中に多数散在している小判型は「村形」といって、一つの村を表し、内部に村名と村高が記されます。幕府の仕様では、この村形内に郡ごとに変えた色を塗り、郡界線を太い墨線で描くことになっています。たとえば正保の美濃国絵図では、美濃国は二十一郡なので、村形が二十一色に塗り分けられています。加えて「正保図」・「古城図」（「鷹場図」は村高なし）では、たとえば村高が「二百四十七石五斗三升九合」と斗升合の単位まで記されていますが、幕府は「二百四十七石余」と表示せよ、としています。墨線は伊勢湾や木曽川の岸に描かれていますが、これは郡界線ではなく堤を表しています。堤を表示することは幕府の仕様にはありません。また、福田新田・常滑・師崎の海岸に「吉利支丹遠見番所」がありますが、他国では「異国船遠見番所」となるのが一般的です。

以上のような幕府の仕様と三図との相違がなぜおこったのでしょうか。縮尺など重要な事項を除き、実は幕府も最初から仕様を絵図元に示したわけではないようです。むしろ絵図元が作業中に生じた疑問点を幕府に問い合わせ、幕府もそこで初めて仕様を決めた、ということもあったと思われます。決められた仕様は当然各絵図元に通知されたのでしょうが、どうしても時間がかかります。そのため、絵図元ではさまざまな絵図が作成されたのです。ただし、絵図元は絵図が完成に近づくと、幕府に見せてチェックを受けなければいけません。幕府から絵図の様式などの間違いを指摘されれば、絵図元はそれを修正して最終的に完成図を幕府に献上しました。尾張国絵図も、献上図は仕様に合致したものだったのでしょう。しかし、ここで新たな疑問が生じます。それは三図のうち一枚が幕府のチェックを受けた図だとすれば、当然幕府から仕様と違う点を指摘されるはずです。するとあとの二枚がどうして仕様に合致しないのでしょうか。

正保の次の元禄の国絵図になると、幕府の仕様が絵図元に徹底され、現存する国絵図で仕様にあわないものはほとんどありません。そもそも完成図を描いたのは、幕府御用の狩野派の絵師たちで、仕様に合わないはずがありません。元禄尾張国絵図は幕府に献上した図と同一の控図が、愛知県図書館に所蔵されています。しかし、様式が統一された元禄図より、仕様にあわない正保図のほうが、研究対象としてずっとおもしろいと思います。

（学芸員　種田祐司）

表紙：宗廟朝庭之礼「御座之間御暇之図」（そうびょうちょうていのれい　ござのまおいとまのず）　32.0×43.5cm

宗廟朝庭之礼

尾張藩主のポケット版幕府行事作法マニュアルである。書名の「宗廟」は、王宮の正殿、政治を行う所をさし、「朝庭」は、王と臣下が一堂に会して儀式を行う場をいう。江戸城本丸御殿、幕府の政庁でおこなわれる儀式の作法を意味する。

内容は、幕閣と在府の諸大名が一堂に参列する年賀・五節句などの公式行事、参府・御暇などの将軍謁見に際して、江戸城大広間等における席次と尾張藩主が取るべき行動を役職別に色分けされた三角の色紙によって示し、行動順の解説が付された五十六枚の図に目録、月別行事一覧、色分の凡例が付属する。いずれも縦六折、横三折で同じ大きさに折って表紙（一〇・八×七・三cm）を付け、十五枚ごとに帙に入れ、二重の箱に納められている。

本書の持ち主であり製作者は尾張家十四代慶恕（よしくみ）（のち慶勝　一八二四～八三）である。二重箱の外箱の蓋裏に「安政丁巳春於東武出来　慶恕自製」とある。箱・帙・表紙の文字も解説もすべて自筆、装丁も慶恕自らの製作であろう。

本図が製作された安政四年（一八五七）春、慶恕は二度目の参府で江戸にいた。藩政改革に着手し、幕府宛の対外政策建白書提出など、次第に中央政界での発言力を強化しつつあった時期にあたる。

表紙は、国元への帰国に際して江戸城中奥、将軍御座之間で御暇の挨拶に将軍に謁見する際の図である。朱紙は三家、紺紙は老中、紺紙に茶紙は若年寄の動きを示し、朱書の行動順の解説に加え、上段墨書の「御暇」に関わる定例事項のメモには、前回の帰国時、嘉永四年（一八五一）二月に老中松平乗全（のりやす）から受けた指示も記されている。

激動する幕末期、尾張藩の命運を決し、維新の政局を乗り切った慶勝の繊細かつ几帳面な一面を示す蔵書である。

『宗廟朝庭之礼』　外箱蓋裏墨書

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫　〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地　TEL（052）935-2173　FAX（052）935-2174
ホームページ　http://housa.city.nagoya.jp/〈蔵書検索もできます。〉

交通案内

■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

【なごや観光ルートバス「メーグル」】名古屋駅前8番のりば名古屋駅発着で平日30～1時間に1本、土・日・休日は20分～30分に1本運行

【市バス】名古屋駅前2番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

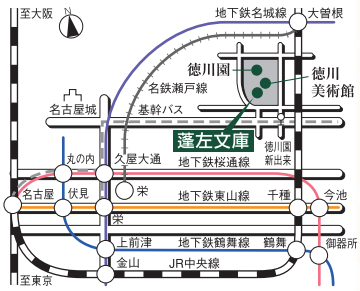
【名鉄バス】名鉄バスセンター3F　4番のりば基幹バス「引山」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分

【ＪＲ】JR中央本線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分

【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車3番出口より徒歩15分　桜通線「野並」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

●栄より

【市バス】栄バスターミナル（オアシス21）3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分



■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場（有料　30分　120円）をご利用下さい。

ご利用案内

■休館日／月曜日（祝日のときは直後の平日）　8月12日(月)は展示室のみ臨時開館します。
12月中旬～1月3日　※催事により変更することがあります。

■展示室／有料　一般：1200円　高大生：700円　小中生：500円（蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧）
【開室時間】午前10時～午後5時（入室は午後4時30分まで）　8月9日(金)～11日(日)午後7時まで延長開館（入室は午後6時30分まで）

■閲覧室／無料・館外貸し出しはいたしません。
【閉架図書】午前9時30分～午前12時　午後1時～午後5時　【開架図書】午前9時30分～午後5時
【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。

「蓬左」第86号　☆平成25年3月31日発行　☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫　☆無料　☆不定期刊行　☆印刷：菱源（株）
※古紙パルプを含む再生紙を使用しています。